

安田常雄先生を送る

樋口雄彦

本館の副館長・研究総主幹であり、研究部歴史研究系教授の安田常雄先生は、2011年3月をもって定年退職されることとなった。赴任されたのは2003年4月なので、本館には丸8年間在職されたことになる。2010年3月に総合展示第6室・現代のオープンが実現し、大きな役割を果たしての退任ということになった。残される立場からすると、オープン後にもまだまだ長くご尽力いただきかったのであるが、誠に残念であり、かつ今後のことが心配でもある。何しろ第6展示室のうち、多くの優れた特長は、安田先生あってこそ生み出されたものなのだから。展示から派生する研究、研究が呼び寄せる資料、資料収集と研究の成果としての展示といった具合に、実現した展示はさらなる資料や研究へと連環していくのであり、起点となった展示の生みの親である先生がいなくなってしまうのは本当に心細い。

先生は、1946年の生まれである。東京都大田区で成長され、占領が終った1952年に小学校に入学された。近所の池上本門寺は、草野球の場所となった空襲の焼け跡を提供してくれたほか、祭礼の日には見世物小屋が立ち並び大道芸人が集まる異空間と化し、大衆文化をイメージする時の原風景になったという。中学生時代には寄席に通ったそうである。また、父上に連れられて見に行った黒澤明の「七人の侍」以来、映画というものに引き込まれていき、高校時代には国立近代美術館フィルムセンターへ通い続けるまでになったとのこと。これら少年時代の体験がはるか後年、研究へと昇華され、本館の展示へと行き着いたと言えそうである。

隅谷三喜男氏に師事され、東京大学経済学部経済学科を卒業されたのは1970年、続いて進んだ同大学院経済学研究科では石井寛治氏らの指導を仰がれたという。1978年からはアメリカの西ワシントン大学東アジア研究センター研究員をつとめられ、1980年には鹿児島大学法文学部に助教授として赴任された。1989年から本館に着任されるまでは電気通信大学電気通信学部教授として教鞭をとっていらした。

最初の大著『日本ファシズムと民衆運動』（1979年、れんが書房新社）は、大正デモクラシーからファシズムへの転換を農村青年の思想・運動に着目し実証的に追究したものである。無謀にも卒業論文に民間右翼の国家主義運動を書いてみたいと考えていた筆者は、参考とすべく同書を購入したが結局読み通すことはできず、卒論も別のテーマに変更した。まさかその本の著者である安田先生と職場でごいっしょするようになるとは想像もできなかった。同書のイメージが強かった筆者にとって、現在先生が研究テーマとされていることとは何か結び付かないように思えたが、それは浅はかというものだったろう。思想と運動のダイナミズムから民衆史に迫るという視点・方法は首尾一貫しているのである。

ご自身では近年の研究テーマは、「戦後日本の思想文化史」、「学問の方法と思想史」、「戦争と大衆文化」などであると整理されている。すべてを綺麗に切り分けることはできないであろうが、占

領期の大衆文化や対米観、アメリカニゼーション、戦後のサブカルチャー、象徴天皇制などを論じたものは「戦後日本の思想文化史」、思想史・民衆史・同時代史の方法や国民国家論、『思想の科学』などについての論考は「学問の方法と思想史」、戦時期のメディアや男性像、平和運動などに関する論考は「戦争と大衆文化」にあたるだろう。戦前・戦後の大衆文化を思想史の対象として取り上げた研究は、これらの諸テーマがまだ十分に歴史学の対象とみなされていない段階で、いち早く着目するとともに、研究のレベルを一気に引き上げたという意味において学界を先導する意味を持った。

高度な思索にもとづく先生のご研究は、具体的なモノ資料を取り扱い、雑多な実務を伴う博物館という業界とは一見すると極めて縁遠いものである。しかし、研究こそをすべての基礎に置く歴博だからこそ、先生の頭脳が必要とされたのであり、また先生だからこそ本館で十二分に力量を発揮していただくことができたのである。漫画や雑誌、オモチャ、流行歌、映画・テレビCMの映像など、先生の研究がもたらした新しい博物館資料が駆使された第6展示室はそのことが見事に結実した小宇宙である。

歴史の大状況を扱い、思想史を研究されていることもあって、地域史にはあまり関係されていないような印象もあるが、自治体史に携わられたこともあった。裾野市史編さん専門委員や千葉県史専門委員として『裾野市史』や『千葉県の歴史』の近現代を扱った巻の編纂に従事されたのである。『裾野市史』に関しては、当時近くの町に勤務し、市史編纂事業というものの一端に加わっていた筆者にとって、同書はとても洗練されたものに見えたことを覚えている。史料編の史料の選択・配列、通史編の構成・叙述などが網羅主義的なものではなく、テーマを絞った極めて厳選されたものだったからである。それは安田先生の主張が反映された結果だと聞いた。

児童・生徒向けの通史の監修や教科書の執筆も手掛けられた。難しい最先端の学問の成果を子どもたちに広めるという努力も惜しまなかったのである。

本館の共同研究としては、「20世紀における戦争Ⅰ」、「20世紀における戦争Ⅱ」を代表として主宰された。もちろん総合展示第6展示室の展示プロジェクト委員会では代表者であった。そのため研究と作業とをリンクさせ、同時並行で進めることが可能となった。

本館では副館長のほか、研究推進センター長なども歴任された。研究会やシンポジウム、もちろん館内の各種会議でも司会をつとめられることが多かった。どんな時でもその司会ぶりは手慣れたもので、課せられた役目を上手に果たされていた。込み入った内容、緊張を伴う会議の際も余裕が感じられ、どこか楽しんでいるかのようであった。

総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻の専攻長もつとめられ、大学院教育にも力を注がれた。先生を慕って集まり指導を受けた学生たちからは、思想史やメディア史を専門にした優秀な人材が輩出している。

ちなみに、研究者としての歩みや歴博でのお仕事を持つ意義については、先生ご自身が総括された最近の文章があるので（「ベトナム戦後と研究の原点—『日本ファシズムと民衆運動』のころ—」『歴博』第163号、2010年11月）、それをお読みいただいたほうがよいであろう。

先生には退職後もますます活躍される場が待っていると思う。新たな研究成果を世に問い続けられることをご期待申し上げる次第である。そして今度は外から本館を応援して下さるようお願い申し上げます。